

文化 第80巻 第1・2号 一春・夏一 別刷  
平成28年9月24日発行

## 高知県のサ行イ音便について

坂 喜 美 佳

# 高知県のサ行イ音便について

坂 喜 美 佳

## 1. はじめに

現代共通語では、五段活用動詞の連用形に助詞「テ」や助動詞「タ」がつくとき、殆どの行で音便形をとるが、サ行に限っては音便形をとらない。しかし、サ行動詞も文献国語史上は他の行と同様、平安時代で音便化を起こしていたこと、なぜか江戸時代に入って非音便形をとるようになったことが指摘されている。このサ行イ音便という現象は、現在西日本を中心とした方言に残存している。

サ行イ音便は、文献国語史上、注目を集めてきたテーマであり、数多くの研究で取り上げられてきた。その結果、中央語文献に現れるサ行イ音便については、それを支配する諸条件を含めてかなりの実態が明らかになっている。一方、そのような歴史的変異に対して、地理的変異である方言については、サ行イ音便の実態は十分明らかになったとは言い難い。『方言文法全国地図(以下GAJ)』における分布の把握や各地の方言集に簡単な記録はあるものの、動詞活用の一部として数語を扱う研究や、個々の動詞を対象とする個別具体的な研究に留まっている。

中央語文献に現れるサ行五段(四段)動詞は、全てがイ音便を起こすわけではない。イ音便を起こさないまたは起こりにくい動詞には以下のものがあると橋本(1962)、奥村(1968)、北原(1973)などで指摘されている。

- ① 2モーラ動詞アクセント第一類の語…「押す」「貸す」「消す」など
- ② 使役性他動詞…「言わす」「折らす」「持たす」など
- ③ 語幹末が長音である語…「申す」「通す」「催す」
- ④ 語幹末母音がeの語…「返す」「試す」「示す」(「消す」「召す」)など

本稿では、中央語文献上で音便化しない語群の特徴を整理した上記①～④を

「中央語規則」と呼び一定の基準とする。この規則に従う傾向を示す方言もあれば、そうでない方言もある。坂喜(2010)では、富山県方言はおおよそ中央語規則に従っていることが分かった。一方坂喜(2011)では、鹿児島県南部方言は中央語規則に従わないことが分かった。このように、中央語規則への従い方に関していくつかのタイプがあるようである。どのようなタイプがあるのか更に明らかにするため、本稿では高知県方言を取り上げることにする。中央語規則が各地にどのような形で残り、また変容した姿を示しているのかを見ることで、いわゆる中央語に限らず、日本全体でのサ行イ音便の展開が明らかになるだろう。

本稿は、四国地方の中で、唯一サ行イ音便の残存が報告されている高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に高知県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察した。以下、高知県におけるサ行イ音便の実態を探ることを論点に据え、次のように進める。まず2節で先行研究について記述する。3節で調査結果とそれを元に、中央語規則と照らし合わせた実態について記述する。4節で高知県と鹿児島県南部の調査結果を比較しながら、5節で現在の高知県のサ行イ音便の実態が成立した要因を考察し、6節でまとめる。

## 2. これまでの言及

前節で述べたように、方言におけるサ行イ音便について記述している先行研究は少ない。特に高知県におけるサ行イ音便について述べたものは、管見の限り土居(1962)、浜田(1966)、吉田(1984)などで概説が述べられている程度である。例えば吉田(1984:432)では「サ行五段活用動詞がイ音便をとる現象がある。カクイタ(隠す)・ホイタ(干す)など。幡多地方では、これはオトヒタ(落とす)のように、いわばヒ音便化する傾向がある。」のように述べられている。他にGAJや高橋(1986・1990)で数語のみだが県内での分布が分かる。GAJでは「出す」と「貸す」の2語が高知県内15カ所において調査されており、結果を地図で示すと、以下の図1・2のようになる。「出す」と「貸す」はそれぞれアクセントが、「出す」は第二類であり、「貸す」は第一類である。つまり、中央語規則①によると、中央語において「出す」は音便化する動詞であり、「貸す」は音便化しない動詞である。1語ずつではあるが、この2枚で中央語規則①がどのような分布を成しているのかを見ることのできるのである。図1と2を比べると、

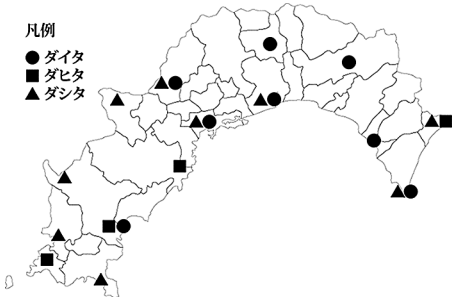


図1. GAJ 出した

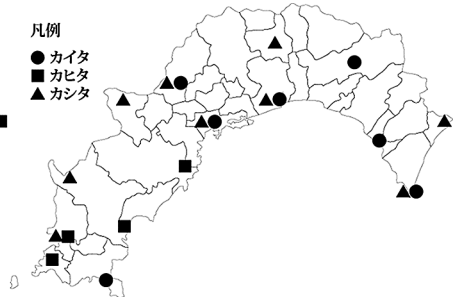


図2. GAJ 貸した

イ音便形が現れる地域はおおよそ同じようである。しかし「出す」でイ音便形をとり「貸す」で非音便形をとる地点やその逆の地点もあり、動詞により地点により様々であることがわかる。この2語だけでは、高知県にサ行イ音便が存在することは分かるが、その内実まで詳しくは分からないため、高知県においてサ行イ音便の実態を調査することにする。

### 3. 高知県におけるサ行イ音便の実態

#### 3.1. 調査概要

高知県全域においてサ行イ音便の実態を掴むため、調査を行った。調査概要は以下の通りである。

調査期間：2014年2月～8月

調査地点：高知県内旧市町村  
区分の13地点(図  
3を参照)

調査方法：臨地面接調査で  
「「出す」を「ダイタ」  
と言いますか。」と  
イ音便形の可否を  
尋ねた。



図3. 高知県調査地点

調査語：共通語形のサ行五段動詞2モーラ23語・3モーラ130語・4モーラ48語・5モーラ22語・複合動詞31語・使役性他動詞17語の計271語。

インフォーマント：その土地生え抜きの60歳代以上の方、各地点1名で計13

名である。この調査のインフォーマントの出身地・生年・性別 (M: 男性 F: 女性) を以下に挙げる。

(土佐清水) 土佐清水市越前町 1943M	(高知) 高知市春野町芳原 1935M
(大方) 黒潮町入野 1937M	(香北) 香美市香北町永野 1942M
(窪川) 四万十町繁串 1931F	(物部) 香美市物部町別府 1943M
(東津野) 高岡郡津野町芳生野 1918F	(田野) 安芸郡田野町 1934M
(須崎) 須崎市上分丙 1926M	(奈半利) 安芸郡奈半利町 1938F
(吾川) 吾川郡仁淀川町大崎 1930M	(室戸) 室戸市室戸岬町三津 1927M
(土佐) 土佐郡土佐町土居 1937M	

## 3.2. 調査結果

### 3.2.1. イ音便とヒ音便

調査では、窪川のみ音便形が全く現れなかった。インフォーマントからは、さらに年配の人が使用するという情報を得たので、窪川で全く用いられないわけではないようである。しかし今回の調査では音便形が得られなかったので、以降の表に窪川の結果は含めない。その窪川以外の地点では音便形が得られた。ただし、音便形とひと口に言っても、先行研究にもあるように高知県には“ヒ音便”が存在し、「イ」で実現される地点と「ヒ」で実現される地点、それが混在している地点がある。その音便形が1語でも現れた地点について地図に示すと図4のようになる。はっきりと傾向は見出せないが、どちらかと言えば西側にヒ音便の地点があり、東側に混在している地点があるようである。次の項以降は「ヒ」で実現されていても音便形とみなすことにする。

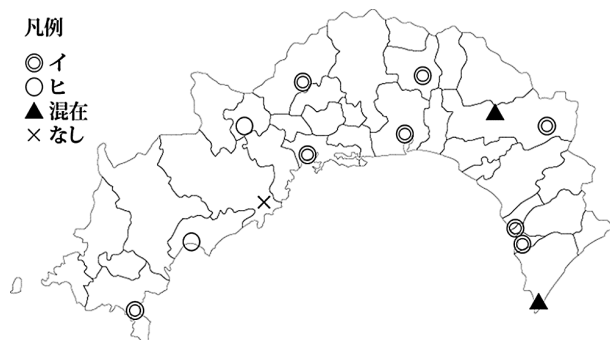


図4. イ音便とヒ音便

### 3.2.2.2 モーラ動詞アクセント第一類の語

それでは、中央語規則①～④の順に各地点がその規則に従っているかという観点から調査結果を見ていこう。調査語はそもそもその語自体を使用しないというものもあり、それらを同等に扱うと調査結果が分かりにくくなる。よって以降の結果の表は、窪川以外の12地点でその動詞を使用するという回答が50%を超えた語を抜粋し掲載した。また、地点名を左側は西部、右側は東部となるように順に並べている。○が音便形を用いる、×が非音便形を用いる、空欄はその動詞を使用しないと回答されたものである。

まず、①2 モーラ動詞アクセント第一類の動詞について見ていこう(表1)。第一類のアクセントは京阪式アクセントではHH、東京式アクセントではLHになるもの、第二類のアクセントは京阪式アクセントではLH、東京式アクセントではHLになるものである(H=高く発音、L=低く発音)。地点を見ると、大方・須崎・香北では、使用する動詞は全て音便化している。土佐は少し非音便形の動詞が多いが、その他の地点では1-3語を除き全て音便形を用いるようである。動詞別に見ると、物部より東側では「押す」は音便化していない。全地点で音便化するのが「消す」「出す」「干す」、土佐を除く全地点で音便化するのが「貸す」「蒸す」である。アクセント類別を見ると、どちらかと言えば第二類の方が、非音便形が多く出ている。しかし、×が多い「濾す」「越す」は空欄も多く、普段から多用しない動詞であるから音便形にならないとも考えられる。空欄がない動詞の中では「押す」の非音便形が4地点で回答されており、しかもその回答が物部・田野・奈半利・室戸と高知県の東端にまよって現れていることから、地域的な傾向が存在するかもしれない。この「押す」の非音便から、はっきりとはしないが中央語規則が一部において残存している感じがある。

表1 2 モーラ動詞

中央語規則①		土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
第一類	オス(押す)	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	カス(貸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
	ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	タス(足す)	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○
	ヘス(減す)	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
第二類	コス(濾す)	×			○	○	×	×	○	×		○	○
	コス(越す)	×	○	×			×	×	○			○	○
	サス(刺す)	×	○	○	○	○	○	×	○		×	○	○
	サス(注す)	○			×	○	○	○	○	○	×	○	○
	サス(挿す)	○	○	○	×	○	○	○					
	ダス(出す)	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	ホス(干す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムス(蒸す)	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	

### 3.2.3. 使役性他動詞

次に、②使役性他動詞について見ていこう(表2)。全ての地点で音便形が回答されており、非音便形のみ用いるという動詞はなかった。他のサ行動詞に比べても使役性他動詞は音便化しやすいもののものであり、その動詞を使用すれば音便化する。よって高知県において中央語規則②は生きていないことがわかる。

表2 使役性他動詞

中央語規則②	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
アソパス(遊ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イカス(行かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
イワス(言わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オラス(折らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カガス(嗅がす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キカス(聞かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クワス(食わす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
コロパス(転ばす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
ネムラス(眠らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
シラス(知らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナカス(泣かす)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
ナワラス(習わす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネカス(寝かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ノマス(飲ます)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシラス(走らす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハタラカス(働かす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モタス(持たす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

### 3.2.4. 語幹末が長音である語

次に、③語幹末が長音である動詞について見ていこう(表3)。現代共通語で用いられている語幹末が長音のサ行五段動詞は、「通す」と「催す」の2語のみである。「通す」は田野で非音便となっているが、語幹末に長音を含まない3モーラ動詞「落とす」のように多くの地点で音便化するようである。ただし、田野で非音便形が回答されているということは、僅かに中央語規則が生きているとも考えられる。4モーラ動詞になると全体的に使用頻度が下がり空欄や×が現れるが、殆どは語幹末に長音を含まない「施す」のように1地点で非音便形が回答されるのみである。対して語幹末が長音である「催す」は土佐清水・吾川・高知・土佐・物部の5地点で非音便形が回答されており、語幹末に長音を含まない4モーラ動詞と比較すると明らかに非音便形が多く、これは中央語規則が「催す」においては多少残存していると考えられる。

表3 語幹末が長音である語

中央語規則③	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
トース(通す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○
cf.オトス(落とす)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モヨース(催す)	×	○		×	○	×	×	○	×	○		
cf.ホドコス(施す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○		○	

## 3.2.5. 語幹末母音がeの語

最後に、④語幹末母音がeの動詞について見ていこう(表4)。全体的にかなり多くの地点で音便形が回答されている。つまり、語幹末母音がeであるという規則は残存していないと考えてよいだろう。しかし、「返す」だけは、「枯らす」「隠す」「落とす」など他の語幹末母音を持つ語と比較して、非音便形で回答される地点が多く、中央語規則に従っている様子が窺える。これは「返す」が、語幹末母音eが子音を伴わない単独母音であることから、他の子音を伴った語幹末母音がeである動詞よりも音便形になりにくいのかもかもしれない。また、複合動詞においても「一返す」で非音便形が多少回答されており、本動詞でも複合動詞でも「返す」は音便化の妨げになっているようであることが分かる。

表4 語幹末母音がeの語

中央語規則④	土佐 清水	大方	東津野	吾川	須崎	高知	土佐	香北	物部	田野	奈半利	室戸
ケス(消す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カエス(返す)	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×	
シメス(示す)	○	○	○	○	○	×	○	○				
タメス(試す)	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
ナメス(なめす)		○		○	○	○	○		○			
クツガエス(覆す)	○	○		○	○	○	○	○		○		
ヒルガエス(翻す)	○	○		○	○	×	○	○		○		
cf.カラス(枯らす; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
cf.カクス(隠す; 語幹末u)	○		○	○	○	○		○		○	○	○
cf.オトス(落とす; 語幹末o)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
フキケス(吹き消す)	○	○		×	○	○	○	○	○	○	○	○
イイカエス(言い返す)	○	○	○	○	○	×	○	○			×	○
ウラガエス(裏返す)	○	○				×	○	○	○	○	×	○
ヒキカエス(引き返す)	○	○			○	×	○	○	○	○	×	○
トリカエス(取り返す)	○	○	○	×		×		○		○	×	
ヒックリカエス(ひっくり返す)	○	○	○	○		×		○		○	×	×
タタキノメス(叩きのめす)	○			○	○	○		○	○	○		○
cf.オモイダス(思い出す; 語幹末a)	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
cf.ノモス(飲み干す; 語幹末o)	○			○	○	○	○	○	○	○		○



### 3.3. 調査結果まとめ

ここまで①～④の中央語規則を一定の基準とし、調査結果を元に高知県の各地点でその規則が当てはまるかどうかを見てきた。結果、①③④の中央語規則は僅かに残っていることが確認できた。しかし、殆どの動詞・地点では中央語規則を守らず音便形となっている。今回の調査結果からは、中央語規則の残滓が多少あるようであるが、現在の高知県では、大半のサ行五段動詞が中央語規則に関係なく音便化していることが分かった。つまり、高知県において中央語規則は崩壊していることになる。

## 4. 鹿児島県南部との比較

前節で高知県では中央語規則が崩壊していると述べたが、坂喜(2011)では鹿児島県南部でも中央語規則が崩壊していると述べている。今高知県との比較のために、鹿児島県南部での調査結果のうち、① 2モーラ動詞アクセント第一類の動詞の調査結果を示す(表5)。

表5 鹿児島県南部

中央語規則①		西之表	南種子	安房	宮之浦	串木野	里	平良	鹿島	川辺	枕崎	指宿	知覧
第一類	オス(押す)	×	○	×	×		×	○	×	×	×	×	×
	カス(貸す)	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×
	ケス(消す)	×	×	×			○	○		×	×	×	×
	タス(足す)	○	○		×		○	○	×	×	○	×	×
第二類	サス(刺す)	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
	サス(差す)	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	×
	ダス(出す)	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ホス(干す)	○	○		×	×	○	○	×	×	○	×	×
	ムス(蒸す)	○	○		×	×	×	○	×	×		×	

鹿児島県南部では、音便形になるか否かは地点ごとに異なってくる。地点により規則の意識が薄れ、崩壊しているパターンと、串木野・鹿島・川辺・枕崎のように中央語と全く同じというわけではないが、なんとなく規則に従っているパターンがある。崩壊しているパターンには、西之表・南種子・里・平良のように殆ど全ての語が音便化するパターンと、安房・宮之浦・指宿・知覧のように殆ど全ての語が音便化しないパターンの2つがある。このように、鹿児島県南部には全部で3パターンが見られる。なんとなく規則に従うパターンを見ると、かつては鹿児島県南部にも中央語規則が存在したのではないかと考えら

れる。中央語規則が僅かに認められる、しかし全体的には規則は崩壊しているという点で、高知県と鹿児島県南部は共通する。ただし表1と表5を比べると、明らかに表1の高知県の方が、音便形の回答は多い。この傾向は中央語規則①についてだけではなく、②～④についても同じである。これは、高知県では全地点が、鹿児島県南部にある3つパターンのうち、規則が崩壊し殆ど全ての語が音便化するパターンをとっているということである。

## 5. 高知県におけるサ行イ音便の実態成立の要因

前節で高知県では全地点が、規則が崩壊し殆ど全ての語が音便化するパターンをとると述べたが、規則が崩壊していれば、鹿児島県南部のように地点によって音便化するか否かが異なるのが普通であるように考えられる。しかし、高知県で鹿児島県南部のようにならないのはなぜなのだろうか。高知県方言に関する先行研究を手がかりとして考えてみたい。

高知県には、吉田(1998:432)で「母音間で[s]が弱まりやすいこと(例ドーシタ>ドーイタ、ソシタラ>ソイタラ)」があると述べられている。これは、サ行イ音便に限らず、この地域で母音間のs音が脱落する傾向があるということである。さらに、平山輝男他編(1992;258)の高知県方言の解説の項に「シ/si/も東京語に比べて摩擦の程度が少なく、例えば、ドウイタシマイテ(どういたしまして)のように時に脱落する場合もあるが」という記述がある。また、浜田(1966:148)は幡多地方(高知県西部)のサ行イ音便に関して、

サ行四段の音便形は京阪地方と同じくイ音便になるのが普通であるが、注意して聞くと、榎垣氏の言われる「シ」が「ヒ」になった「落ヒタ」「増ヒタ」等の形を聞きとることができる。またサ変動詞の連用形の「し」もタ行子音の前に来る時には「ヒ」と発音するのが普通である。(中略)サ変動詞ではないが、上代の作品に残っている古い尊敬の助動詞「す」の連用形「し」が「ひ」と訛って高岡郡檜原村に残っている。(中略)この「ひ」も、前述の幡多の「落ヒタ」「増ヒタ」「ドヒタチ(著者注:「どうしたとて」の意)」の「ヒ」と同様、その生成から考えて、実際の発音は多分「th」音であろう。

と述べている。s音と言っても、この現象はサ行全体に及ぶものではなく、タ・

テの前に「シ」が来ると、「ヒ」に弱化したり「イ」のようにsが脱落したりするというこのようである。先行研究に挙げられている例だけでなく、著者が調査の際に得た例も「アシタ(明日)>アイタ」「ノキシタ(軒下)>ノキヒタ」「ドーシテ>ドーヒテ、ドーイテ」「ソシテ>ソイテ」「ソシタラ>ソイタラ」「クローシタ(苦勞した)>クローヒタ」等のように、品詞に関わらず全てタ・テの前の「シ」が弱化・脱落しているものであった。

この高知県での音声現象は、たまたまタ・テが続くと「シ」が「イ」になるというサ行イ音便の環境と合致していることになる。この点で、中央語規則が崩壊していると言っても、全て音便形となる方向に向かったのであろうと考えられる。つまり、中央語規則が崩壊すると、音便非音便が混在したり、全て非音便形になったりする可能性もあるが、高知県では、動詞の音便という範疇を超えてより一般的な音声現象が偶然重なったことにより、この音声現象に後押しされ、多くのサ行五段動詞が音便化することになったのだらうと推測される。

通時的には、中央語規則に支配されたサ行イ音便の現象が、中央から高知県へ入ってきた当時、高知県でもそれを受け入れ、音便化する語・しない語がそのまま定着したのだらう。その後、音声的な「シ」が弱化・脱落するという現象が広がり、それに引きずられて非音便形であったものも含め全てのサ行五段動詞が音便化するようになった。そこで中央語規則が崩れたのであろう。サ行イ音便は後からできた音声的な事情に巻き込まれた形になった可能性が考えられる。

逆に言えば、「シ」が弱化・脱落するという音声現象によって、サ行イ音便が守られたということにもなる。四国地方の高知県以外の県でサ行イ音便が残らないのはなぜかと言うと、この音声現象が、高知県で特に強いものであったからではないか。平山輝男他編(1992)の愛媛県方言の解説の項には「タ行音の前のシがヒに発音される傾向がある。(中略)トバシテがトバイテとなる「サ行イ音便」はないが、トバヒテは散在する。」とあり、香川県方言の項には「ヒ/hi/、シ/si/は東京語に比べて、摩擦と口蓋化の程度が弱い、高知方言ほどではない。」とある。これを見ると、四国地方では一般に「シ」の摩擦や口蓋化が弱く「ヒ」に発音される傾向はあるが、高知県では特にその傾向が強く、時にはsを脱落させ「イ」にまでなることが分かる。

改めて言うと、まずある時期に四国地方全域で、中央語規則を伴ったサ行イ

音便を受け入れた。次に中央でサ行イ音便が衰退し、非音便が復活することで、その影響が四国に及んできた際、高知県以外の3県はすぐにそれを取り入れてサ行イ音便が衰退したが、高知県の場合はすでにタ・テの前の「シ」が弱化・脱落するという現象が広まっており、その影響でイ音便が残り、衰退しなかったのであろう。ただ、その残り方は中央語規則が崩壊したものであり、サ行五段動詞は殆ど全て音便化する、という現在の高知県のサ行イ音便の状態になったのだろうと推測される。

## 6. おわりに

以上、高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元に高知県におけるサ行イ音便の実態とその成立について考察し、次の点を明らかにした。

- (1) 高知県では、僅かに中央語規則①③④の存在が認められるものの、全体としてほぼ崩壊している状態であると言ってよい。
- (2) 鹿児島県南部のように崩壊のパターンが複数ある状態ではなく、高知県は全地点においてほぼ全て音便化するというパターンの崩壊状態であり、同じ崩壊状態と言っても内実は異なる。
- (3) 動詞の音便よりもより上位概念の音声現象が、サ行イ音便という動詞の一形態の、地域独自の有り方に影響を与えることがある。

今後の課題としては、高知県や鹿児島県南部と異なる中央語規則の崩壊タイプがないか、また富山県と異なる中央語規則の保存タイプはないか、他のサ行イ音便が残存する地域でも調査を行うことが挙げられる。また、今回は高知県のタ・テの前の「シ」が弱化・脱落するという音声現象を根拠としているが、概説書等の先行研究に頼って考察したものであり、改めてその音声現象についてしっかり調査した上で、サ行イ音便との関連について今回の論を補強する必要がある。

## 【参考文献】

- 奥村三雄 (1968) 「サ行イ音便の消長」『国語国文』37-1 (奥村三雄 (1962) 『方言国語史研究』東京堂出版所収)
- 北原保雄 (1973) 『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院
- 国立国語研究所 (1991) 『方言文法全国地図』第2集 国立印刷局
- 坂喜美佳 (2010) 「富山県におけるサ行イ音便の実態」『言語科学論集』14
- 坂喜美佳 (2011) 「鹿児島県における動詞の音便について」第364回国語学研究会発表資料
- 土居重俊 (1962) 『高知県ことば読本』高知市立市民図書館
- 橋本四郎 (1962) 「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』31-4 (橋本四郎 (1990) 『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店所収)
- 高橋顕志 (1986) 『松山市・高知市間における方言の地域差・年齢差—グロットグラム分布図集—』高知女子大学文学部国語学研究室
- 高橋顕志 (1991) 『四国言語地図—1986—』高知女子大学文学部国語学研究室
- 浜田数義 (1966) 『「幡多方言」の研究』高知県立中村高等学校内方言研究同行会
- 平山輝男他編 (1992) 『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 柳田征司 (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 吉田則夫 (1998) 「高知県の方言」日野資純他編『講座方言学』8 国書刊行会

## Euphony of the S-ending Verb in Kochi

Mika SAKAKI

When the continuative-form of the vowel-stem verbs gets *-te* or *-ta* in the common Japanese, there are euphonic sound changes in most rows, but there is no euphonic sound change in the S-row. This phenomenon called “*Sagyo-I-onbin*” is found in the Western dialects now. In Shikoku the euphony of S-ending verbs change is reported only in Kochi. So, I investigated the *onbin* or non-*onbin* of S-ending verb there. I considered the actual situation of the *onbin* of S-ending verb in Kochi by the results of the survey. For the purposes of this essay, the term “the rules in old standard Japanese” will be taken to mean the characteristic of the verbs which is non-*onbin* in old standard Japanese. And I watched findings whether the rule came under the basis in Kochi. Results revealed the following: 1) Although I found “the rules in old standard Japanese”, as a whole, it has broken up. 2) The state of Kochi is different from a state of south Kagoshima. 3) A phonetic rules may affect the *onbin* of S-ending verb.